

# 助動詞 る・らる

る・らる…(受身・尊敬・自発・可能)↓未然形

に接続

る	れ	れ	る	るる	るれ	れよ	受身・尊敬 自発・可能
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られよ	

- ① 受身：(〜レル・〜ラレル)
  - ② 尊敬：(〜ナサル・オ〜ニナル)
  - ③ 自発：(ツイツイ・自然ト〜レル)
  - ④ 可能：(〜デキル)
- 自発・可能の命令形はない

## ポイント

① 「る」「らる」の上に対象を表す格助詞「に」がある、または「に」を補うことができたら↓受身(「に」の上はほとんど人物)

〜(に)―「る・らる」↓受身

意味上、受身という時もある

〈例〉<sup>しうとめ</sup> 姑しうとめに思はるる嫁よめの君きみ  
受

② 高貴な人物―「る・らる」↓尊敬

○ 「れ給ふ」・「られ給ふ」の「れ」・「られ」は尊敬ではない(受身のことが多い)

〈例〉かの大納言、いづれの船にか乗らるべき

尊

② **人物** — 「る・らる」 ↓ 尊敬  
ただし、「我」（一人称）はダメ。

② 謙讓  
+ 「る・らる」 ↓ 尊敬の時が  
圧倒的に多い。

〈例〉仰せらる・申さる・さぶらはるる  
※ 「仰せらる」の「らる」は絶対に尊敬

③ 「る」・「らる」の上に感情・心中を表す動詞があったら、  
「る」・「らる」は自発

（自分の）感情・心中 + 「る・らる」 ↓ 自発  
（自分の）動作行動 + 「る・らる」 ↓ 自発

〈例〉けふは都のみぞ思ひやらるる  
感情・心中 ↓ 自

④ 「る」・「らる」が可能の時は平安時代の文では必ず  
下に打消（反語）がくる ↓ 打消の語：「ず・じ・まじ」  
（助動詞）・「で」（接続助詞）・「なし」（消え用紙）

— 「る・らる」 + 打消 ↓ 可能

〈例〉おそろしくて寝も寝られず  
可打

（「寝も寝られずは慣用表現として覚えておいてもいい。  
寝ることができない」）

※「る」は四段・ナ変・ラ変の未然形(Ⅱ a 段)に接続し、「らる」はそれ以外の未然形(Ⅱ a 段以外)に接続。

※中世(鎌倉、室町)の文では「る・らる」の下に打消がなくとも「る・らる」は可能な時もある。

冬はいかなるところにもすま<sup>可</sup>る(徒然草)

(Ⅱ冬はどんなところにも住むことができる)

※無生物(生きていないもの)が主語になった時の「る・らる」は原則として受身にならない。

大仏殿、建て<sup>られ</sup>ける時に  
大仏殿が建てられた ×  
大仏殿をお建てになった ○

※日記では自分以外が主語なら「る・らる」に自発はない。自分が主語の時は自発の時が多い。

## 《邪道》

。入試で「る」「らる」に傍線が引いてあったら自発。

。可能・自発どっちかな?と迷ったら自発。

。自分以外が主語だったら尊敬。